

上越市創造行政研究所ニュースレター

創造行政

上越市創造行政研究所は、平成12年に設置された上越市役所の組織内シンクタンクです。市政における重要課題の解決や理想像の構築に寄与し、地方自治体としての政策形成能力を高めるため、総合的・中長期的・広域的な視点による調査研究などを行っています。このニュースレターは、それらの活動を一部ご紹介するほか、市の公式見解に限定せず、上越市のまちづくりを考える上で多くの方々と共有したい課題等をお伝えするものです。

Joetsu city Policy Research Unit

No.49

Mar. 2021

フィリピン バナウエ近郊バタッドの棚田 © ASEAN-Japan Centre

Contents

P2-5

コラム 上越市の国際化を考える ⑤

国際化の「橋渡し役」③ 上越国際交流協会の活動を通じて

国際化による活力を地域社会の発展につなげていくには、外国人あるいは海外との共生関係を構築する必要があり、そのための「橋渡し役」が大きな役割を担うものと考えられます。本稿では、上越市内においてこの橋渡し役を担う団体の活動をご紹介します。

P6-7

コラム 上越市の地域資源情報の調査に向けて

当研究所では、新潟県上越市を含めた新潟・長野県境をはさむ広域エリアに着目し、この地域ならではの特徴を持つ「地域資源」を取り上げ、特徴の概要や成り立ち、影響力などについての情報収集や編集作業を行っています。

現在、「信越県境地域づくり交流会」の構成団体や参加者等の協力を得て活動の輪を広げ、内容の拡充を目指す準備を進めており、調査の背景や考え方などについてご紹介します。

P8

活動紹介 信越県境エリアの魅力を探るトークイベントの開催 ほか

国際化の「橋渡し役」③ 上越国際交流協会の活動を通じて

グローバル化が進展する中で、地方都市においても国際化の重要性はますます高まっています。国際化による活力を私たち地域社会の発展につなげていくには、外国人あるいは海外との共生関係を構築する必要があり、そのための「橋渡し役」が大きな役割を担うものと考えます。

上越市内でそのような役割を担う個人や団体の活動を取り上げ、国際化の意義や課題を考えます。3回シリーズの最終となる今回は、上越国際交流協会の活動内容をご紹介します。

はじめに

上越国際交流協会（以下、「協会」とします。）は、市民が主体となって多文化共生と国際理解及び海外諸都市との友好親善を深めるため、産業・文化・スポーツ・教育・学術など幅広い分野で国際交流を積極的に推進し、世界の平和を願う開かれた国際平和都市の構築に寄与することを目的として、1996年3月に設立されました。

設立以来、異文化体験を通じた「グローバル意識の醸成」や市民間の交流を図る「市民活動の活性化」、外国人市民の生活支援を基軸とした「多文化共生社会の創成」を事業の柱としてきました。中でも近年は、外国人労働者の増加に伴い「多文化共生社会の創成」に関する活動が増えています。ここでは、それぞれの事業の柱に沿った主な活動を紹介していきます。

上越国際交流協会の概要

- ◇名称 公益社団法人 上越国際交流協会
- ◇英語表記 Joetsu International Network (略称:JOIN)
- ◇所在地 上越市土橋1914-3 上越市市民プラザ2階
- ◇理事長 清水 信博
- ◇会員数 一般会員:193人、外国人会員:65人、団体会員:48社
(2021年3月12日現在)
- ◇開設日 月～金 9:00～18:00 (第3水曜日休み)
- ◇事業の柱
 - ・グローバル意識の醸成
 - ・市民活動の活性化
 - ・多文化共生社会の創成
- ◇設立 1996年3月2日
- ◇運営体制 2004年 行政主体の運営から民営化(任意団体)
2008年 一般社団法人化
2013年 公益社団法人化 ～現在に至る

講師の経験などを取り入れており、海外の文化や歴史、暮らしぶりについても知ることができます。

また、「しゃべり場」は、英語初心者と外国人市民がテーブルを囲み、おしゃべりやゲームをしながら、英会話を通じた交流を気軽に楽しむものです。参加者の年齢や職業、出身国は様々で、「考え方や文化の違いを学ぶことが楽しみで参加している」といった声があります。

2019年の「しゃべり場」のホスト役は、市内の中学校に勤めるALT(外国語指導助手)のアレックスさんが務めました。話し相手の少ない日本での生活に孤独を感じていたアレックスさんですが、英会話に熱心な市民と交流するうちに前向きな気持ちになり、日本語能力試験の合格を手助けしてくれるボランティアにも出会えたことから、「協会の活動に参加したことに感謝している」と話していたそうです。



外国人と気軽に交流できる「しゃべり場」

小中学生のグローバルな意識づくり

市の委託事業である「ワールドキャンプ」は、市内の小中学生を対象としたグローバルな意識づくりの場です。2019年度は浦川原区の宿泊施設「月影の郷」で行われ、40名の小中学生と約20名の外国人スタッフが参加しました。子どもたちと外国人スタッフがグループに分かれ、お互いにコミュニケーションを取りながら、工作や料理を競い合いました。子どもたちへのアンケートには「普段は会うことのない外国人と話すことができて楽しかった」、「身振りや単語だけで理解してもらえた」、「伝えようとす

I グローバル意識の醸成

市民の異文化理解の促進

協会の開催する「語学講座」では、アメリカや韓国出身の市民が講師を務めており、希望する市民は、英語や韓国語での簡単な挨拶表現から学ぶことができます。講義では

る姿勢が大事だと分かった」といった感想がありました。外国人スタッフの中には来日して間もないALTや留学生もおり、子どもたちとの交流を通じて、直接的に日本人の考え方や生活習慣などを学ぶ機会になったようです。



交流体験を通じて国際感覚を養う「ワールドキャンプ」

習中の日本語を用いて、当市の魅力的なスポットや美味しい食べ物を発表するトークイベントなどを実施しています。これらの企画立案や当日の運営にも、ボランティアが関わっています。個性豊かな外国人市民の参加により、1日で5千人ほどが来場する活気あるイベントになっています。



世界の料理屋台などが人気の「にぎわい わいわいまつり」

II 市民活動の活性化

外国人市民と地域社会との関係づくり



様々な国の出身者が集う「お花見交流会」

観桜会の開催期間中には、毎年「お花見交流会」を企画し、協会の会員や外国人を雇用する企業などを通じて外国人市民の参加を募っています。

四季の変化が少ない国、外での飲酒が禁止されている国、冷めた料理を食べる習慣が少ない国などで暮らしてきた外国人にとって、「お花見」の文化は珍しく、初めて参加する外国人は特に感動するそうです。この交流会にはボランティアが同行し、言葉を使わずにジェスチャーだけで遊べるゲームなどを企画して、外国人同士の親睦につなげているとのこと。



一体感が生まれる「民謡流し」への参加

上越まつりの民謡流しにも、外国人市民の参加を募り、市民の寄付でそろえた浴衣の着付けや踊りの事前講習などをボラン

ティアが行っています。2019年の「高田大民謡流し」では、台湾やフィリピン、中国、韓国など12か国の出身者が参加し、70名もの大行列ができました。外国人市民の多くは、ほとんど見よう見まねで踊りの輪に入りますが、踊りきることで参加者の間に一体感や達成感が生まれるそうです。

市民プラザで開催される「にぎわい わいわいまつり」では、外国人市民が出身国の料理屋台を出店するほか、練

III 多文化共生社会の創成

相互理解に向けたコミュニケーションの促進

市の委託事業である「生活日本語講座」では、全く日本語を話せない人からレベルアップを目指す人まで、多くの外国人市民が日本語を学んでいます。開催にあたっては、「日本語ボランティア養成講座」の受講生がスタッフとして協力しています。日本語だけでなく、日本の生活習慣を学ぶことができるほか、参加者とのコミュニケーションを通じ、人間関係を築く場にもなっているそうです。

また、外国人市民が必要なサービスを受けられるように、市では各種表示や生活情報等の多言語化を進めています。災害時や緊急時には、すべての外国語に翻訳して伝えることは困難なため、必要な情報を伝える方法として「やさしい日本語」の普及を進めています。2020年11月には、市との協働により「やさしい日本語」講演会をユートピアくびき希望館で開催しました。頸城区では外国人市民が増加傾向にあり、多くの地域住民が関心を寄せました。参加者からは「外国人の困っている内容が分かった」、「相手の身になって考えたい」といった声があったそうです。

MEMO 「やさしい日本語」への言い換え

- ・「やさしい日本語」とは、普通の日本語を簡単な言葉で言い換えたり、ひらがなで表したものを。
- ・外国人だけでなく、日本人の子どもや高齢者等にとっても分かりやすい表現になる。

〈言い換え例〉

元の日本語	やさしい日本語
相談窓口	そうだん 相談できる ところ、相談する ところ
ここは通行止めです。	とお ここは 通ることが できません。
台風が来る恐れがあります。	たいふう 台風が たぶん きます。

また、同区の公民館で開催した「くびき つながるこうりゅうかい」には、同区在住の外国人市民 8 名と住民 15 名が参加。国際理解教育の授業の一環として上越教育大学の学生たちがサポート役を務め、「やさしい日本語」を使ったレクリエーションで交流しました。英語を話せないと交流できないと思い込んでいた住民の方々が、簡単な日本語により外国人と意思疎通ができたことに喜びを感じたほか、参加した外国人市民からは「地域の人たちと知り合えて良かった」、「もっと多くの日本人とコミュニケーションを取りたい」といった感想がありました。



「やさしい日本語」を使った外国人と日本人の交流会を開催

も外国人患者が医療サービスを安心して受けられるよう、上越地域の医療機関にアンケート調査を行い、医療現場から寄せられた意見や要望をもとに基本会話集や翻訳アプリなどの支援ツールを考案したほか、その支援ツールを活用した医療機関への「出前講座」を実施しました。

外国につながる子どもたちの学習機会の確保

協会では、市の教育委員会や上越教育大学と連携して「外国につながる子ども」の支援を行っています。2020年度は、上越地域の小学1年生から中学3年生まで、中国やフィリピンなど9か国、約30名の児童生徒を対象として、日本語学習や修学の支援活動を行いました。

MEMO 「外国につながる子ども」とは

- ・労働、結婚、移住、留学など、国際的な大人の移動拡大に伴って移動する子どものこと。
- ・「外国人の子ども、外国籍の子ども」と表現しないのは、親の国際結婚により日本国籍を持つ場合や外国籍でも親の仕事の都合で日本での生活が長い場合のように、海外か日本かという二択で捉えきれないため。「外国にルーツを持つ子ども」と言うこともある。
- ・多様な文化的・社会的背景を持ち、家庭内では日本語と母語等による複数の言語環境の中で成長しており、日本での生活に不安や困難を抱える傾向にある。

外国人患者への医療の提供

「医療通訳ボランティア育成講座」では、英語や中国語、タガログ語などを話せる10名のボランティアが、日本語をうまく話せない外国人患者や医療機関から派遣依頼があった場合に備え、通訳技術や基本的な医療知識、国や市の制度及び手続などについて学んでいます。2021年2月に開催された講座のテーマは「妊娠と出産」。近年、外国人市民の妊娠・出産の相談が増えており、「出身国との制度の違いに戸惑ったり、身近に頼れる人も少ないため問題を抱えるケースが多い」とのことです。かつて、協会の相談窓口に来ていた外国出身者も、「自身の経験を踏まえて支援したい」との思いから参加していました。



外国出身者も参加する「医療通訳ボランティア育成講座」

この講座は、協会の会員で組織された外国人医療の支援グループである「JOMNavi(じょんなび)」の皆さんが行っています。自身の英語力を国際交流に生かしたいと考えていた会員や途上国での医療活動に従事していた会員らが、協会の呼びかけに応える中で知り合い、活動することになったそうです。このグループでは、通訳者が不在で

「日本語支援」の活動では、市内小中学校からの依頼に基づき、日本語ボランティアが学校に出向いて個別に日本語を教えることで、子どもたちの不安を取り除き、日本の学校生活に適應できるようにしています。



ボランティアによる日本語の学習支援

「修学支援」の活動では、上越教育大学の教室を利用して、日本人学生と留学生からなるボランティアチームが子どもたちに日本語と母語の学習、国語・社会などの教科学習の支援を行っています。この活動は、教員を志望する学生の実践的・体験的な学びの場にもなっています。この支援経験により、外国につながる子どもや保護者への関わりに対する積極性に加え、日本の子どもの多文化理解・多文化共生を促そうとする意思の形成を目指しています。

市民プラザで開かれる「JOIN 学習塾」



元教員や学生による学習塾

では、元教員や大学院生がボランティアで子どもたちの宿題をサポートしています。日本語の授業についていけずに自信をなくし、学校で疎外感を味わう子どもたちの居場所であり仲間づくりの場になっているそうです。

また、外国につながる子どもたちにとって、日本語を学びながら高校の入試対策をすることは難しく、志望校の選び方や教育費用など、具体的な情報を知らないことが少なくありません。このため「進学ガイダンス」では、生徒と保護者を対象に、高校進学の意味や入学までの流れなどを説明しています。2020年11月に開いた進学ガイダンスでは、高校進学を実感してもらうために、市の教育委員会からの説明のほか、日系ブラジル人3世の先輩が体験談を披露したとのことでした。



清水信博 理事長

本稿の作成にあたり、上越国際交流協会理事長の清水信博さんにお話を伺いました。

多文化共生社会の創成に関する事業の背景について、「当市で暮らす外国人のほとんどが留学生や日本人の配偶者だった時代に比べ、個人や家族単位で来越する労働者が急増しており、生活に直結した手助けが必要不可欠になっている」と話され、支援活動への熱意が感じられました。

今後は、市内の意欲的なボランティアの力を借りながら事業の充実を図っていくとともに、外国人を雇用する企業との関係性を強めるなど、活動の輪を広げていきたいと考えているそうです。

おわりに

今回紹介した取組は、上越国際交流協会の活動の一部ではありますが、「グローバル意識の醸成」や「市民活動の活性化」、「多文化共生社会の創成」といった事業本来の目的に加え、関わった人々の生きがいつくりや仲間づくりにもつながっていることが分かります。また、語学力の高い一部の市民だけでなく、多くの市民にも何かしら楽しく関わることのできる可能性が感じられます。

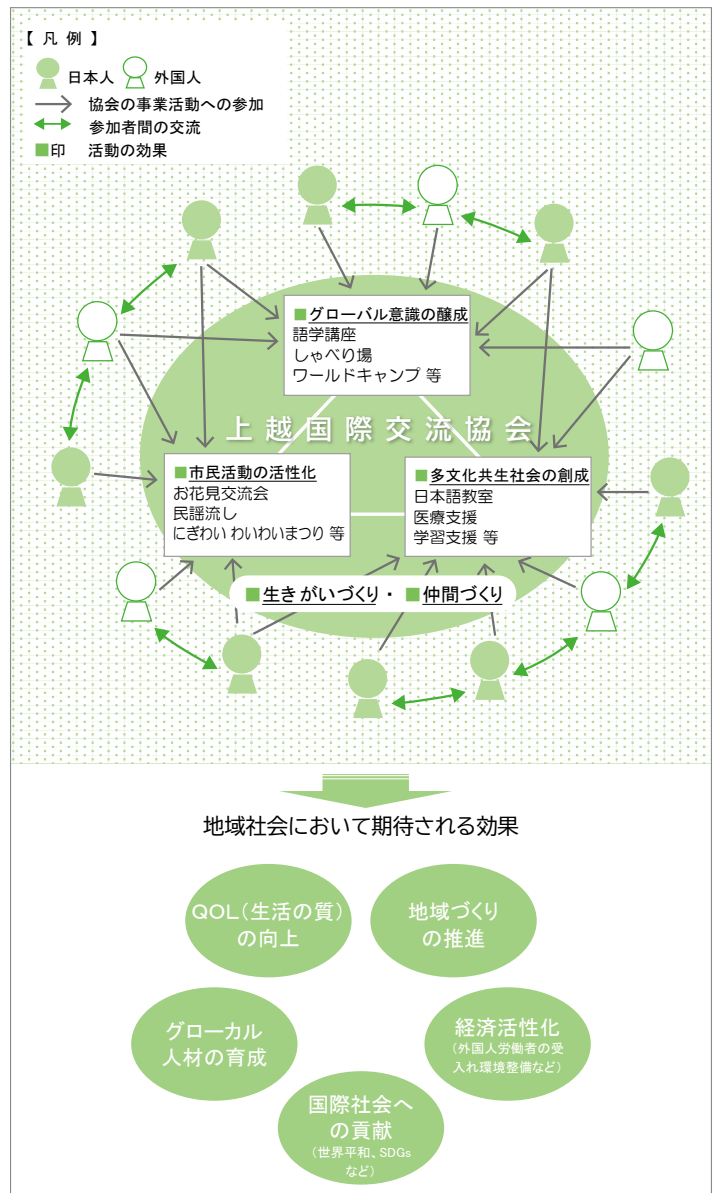
今後とも、これらの成果の積み重ねによって、市民のQOL（生活の質）の向上、地域経済の活性化、グローバル人材の育成や地域づくりの推進、国際社会への貢献などといった国際化の推進による効果の発現が期待されます。

このような活動を可能にしているのは、関わる人々の熱意や能力もさることながら、この協会が、学びと交流のプラットフォームとして、人と人、人と地域、ニーズとシーズ（課題と資源）、複数の分野などを結び「橋渡し役」として機能していることが大きなポイントと考えられます。

たとえば、ある活動への参加者が抱える悩みや課題、あるいは参加者の能力を協会が認知することによって、新たな活動を企画したり、他の活動の担い手として呼びかけることが可能になります。

今後は、このような橋渡し機能の重要性とともに、これらの活動が同協会のスタッフやボランティアなどによって支えられている現状を改めて認識し、地域全体として国際化を推進する持続可能な体制を作り上げていくことが重要と考えます。

（新井 和人）



図：「橋渡し役」としての上越国際交流協会の役割

コラム 上越市の地域資源情報（地域ならではの特徴）の調査に向けて



当研究所では、上越市を起点としつつ、上越・魚沼地方や県境を越えた長野県の北信・長野地方などを含む広域エリアに着目し、その自然環境や都市基盤、産業、文化などの面からこの地域ならではの特徴を持つ「地域資源」を取り上げ、特徴の概要や成り立ち、影響力などについての情報収集や編集作業を行っています。

平成30年度には、試行的に地域資源情報を取りまとめ、過去のニュースレターでもその一部をご紹介してきましたが、来年度からは「信越県境地域づくり交流会」の構成団体や参加者等の協力を得て活動の輪を広げ、内容の拡充を目指す準備を進めています。より多くの方々からご協力をいただきたく、調査の背景や考え方などについてご紹介します。

調査の背景と目的

本格的な人口減少時代の中、将来にわたり住みよい地域であり続けるためには、地域固有の特徴に磨きをかけ、地域の魅力を高めていくことがますます重要となっています。このことは、わがまちへの愛着・誇り（シビック・プライド）や未来志向を持って日々の暮らしを営む人々が増え、この地域が全国・世界の中で存在感や存在意義を示すことでもあります。

そのためには、私たちの地域がどんな特徴を持っているか、その成り立ちや現在の立ち位置を含めて理解し、未来を考える手がかりとして仲間と共有することが重要と考えます。

調査の視点

1 客観的な位置づけ・評価にこだわる

たとえば、自然豊かでお酒がおいしいことをPRする地域は日本全国に存在します。その中であって上越市ならではの特徴とは何か——これを説明するのは意外に難しいことです。もちろん主観的な思いも大切ですが、ここでは生産量や生産規模、質の評価、歴史の古さ、その他の客観的情報をもとに、全国・世界の中での位置づけの把握に努めます。

2 特徴の成り立ちや影響力を探る（総合的視点）

「その特徴が生まれたのはなぜ?」、「その結果生まれたものは何?」という素朴な疑問をもとに、この地域の地形・地質、気候、交通、産業、文化などとの関係性を探ります。特徴の因果関係はその磨き上げに欠かせない情報であるほか、その関係性の中に物語を発見し、地域ならではの特徴を見いだせる可能性もあります。

3 過去から現在までの経過を追う（歴史的視点）

特徴の成り立ちを知ることは今日までの歴史的経過を学ぶことであり、そこには継続の秘訣や直面する課題といった未来への手がかりも含まれます。また、歴史的な内容にとどまらず、現状を知るための統計データや評価等も対象とします。

上越市はどのような特徴を持っているのでしょうか。

たとえば日本三大夜桜や上杉謙信の居城といった具体的なものや、自然が豊か、食べ物が美味しい、人が良いといった印象的なもの、さらには一通りものが揃っていて住みやすい、むしろ特徴がないのが特徴——など、様々な見方があると思います。このほか、上越市の魅力を記した書物等は数多く存在します。

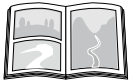
しかし、ここで言う未来を考える手がかりとは、過去から現在までの経過を踏まえ、この地域を楽観的でも悲観的でもなく、客観的かつ総合的に捉えることのできる情報であり、次のような視点にこだわりを持って情報収集や編集作業を行うものとします。

4 近隣地域に視野を広げる（広域的視点）

上越市のみならず近隣地域も含めて仲間と捉えることによって、上越市の魅力が浮かび上がることも少なくありません。まず、近隣地域の魅力はこの地域に暮らす人々や観光などで訪れる人々にとっても魅力となります。次に、そこからわがまちを振り返ることで同様の魅力を発見することもあります。さらには、同質あるいは異質（多様）な地域資源が集積していることや、魅力を高め合ってきた関係性そのものが魅力となる可能性もあります。このことは近隣の市町村にとっても同様であると思います。

5 多様でゆるやかな研究ネットワークを構築する

かつては、学校教員などによる郷土研究が全国的に盛んな時代もありましたが、専門分野の細分化や学校現場の多忙化などから、本調査において一方的にそれらの活動を頼ることは難しい面があります。これらの活動との協力・連携を図る一方、様々な分野や立場から協力者を募り、多様でゆるやかな地域研究ネットワークの構築を目指します。またインターネット等を活用し、未完成の情報も含めてある程度オープンにし、時間をかけながらアーカイブスとして育てていくことを目指します。



地域資源情報の一例

調査の視点に基づき、客観的な位置づけの把握に努めたり、近隣地域に視野を広げたりすることによって、当市の特徴が浮かび上がってきます。以下の情報は一部未確認情報を含んでいますが、一例としてご紹介します。

テーマ

印象的な評価

① 上越市の客観的 位置づけ

④ 近隣地域への視野の拡大 (新潟県上越・魚沼) (長野県北信・長野等)

上越市ならではの 特徴

レジャー

スキー 上越市は日本スキー発祥の地。一方、スキー場自体は全国に数多く存在。



♣日本スキー発祥の地は事実上公式見解(その後、妙高・魚沼・北信・白馬などへ伝播)

♥湯沢のスキー場群の規模は全国有数
♥上越国際はスキー場単体の面積最大
♥妙高周辺の規模も国内有数

♥野沢温泉スキー場の滑走距離は最長
♥志賀高原スキー場の面積は最大
♥白馬周辺の規模も国内有数

日本スキー発祥から現在に至るまで国内有数の歴史と規模を持ち、人材を輩出するスキー場集積エリアの一角。

食

日本酒 新潟県は酒どころとして一定の知名度あり。一方、近年は全国各地で高い評価の酒が登場。



♣高田税務署管内の酒蔵は16(全国6位タイ)
♣頸城杜氏は、日本三大杜氏である越後杜氏の一角

♥長岡税務署管内の酒蔵は19(全国4位)
♥生産量第2位の酒米「五百万石」の主産地

♥長野税務署管内の酒蔵は18(全国5位)
♥生産量第3位の酒米「美山錦」の主産地

相互に影響

全国トップクラスの酒蔵密集地帯の一角。酒づくりの技術や文化を継承してきた歴史も有数か。

そば 地元の評価は高い。一方、全国の中山間地域で広く生産され、国内生産量の過半数は北海道。



♣つなぎに自然薯を使うそばが多い

♥つなぎにふのりを使う「へぎそば」は稀有

♥知名度全国区の「戸隠そば」のつなぎは小麦粉
♥「富倉そば」などつなぎにおやまぼくちを使う例は稀

多様なつなぎのそばが集積する国内でも珍しい地域の一角。

動植物

ブナ林 市内に魅力的なブナ林あり。一方、ブナは寒冷地に広範に分布。世界遺産・白神山地が著名。



♣標高が低く集落に近いブナ林は国内でも稀な存在?

♥市町村の木に選定する自治体は6つ(全国では40程度)
♥天水越のブナ林は日本の自然100選のブナ林6か所の1つ
♥森太郎は森の巨人たちに選定されたブナ林4本の1つ
♥カヤの平のブナ林は環境省モリノグササイト

食、産業、レジャー、文化の成り立ちなどに影響

暮らしと共存してきた典型的なブナ林帯が広がる地域の一角。

地形・気候

雪・雨 市内高田の大雪は著名だが、今年を除き近年少雪傾向。「世界一の豪雪都市は青森」との記事もあり。



♣最深積雪の日本記録あり(気象台等・有人集落)
♣年度による積雪量の違いはトップクラス

♥国内の最深積雪ランキングトップ20のうち10か所あり
♥1日降雪量の日本記録あり(旧国鉄)
♥最深積雪の日本記録あり(旧国鉄)
♥長野市は最も降水量が少ない県庁所在地

動植物、食、産業、レジャー、文化などの成り立ちなどに影響

国内随一の深雪地帯の一角。そこに国内有数の少雨地帯が隣接。年度や地域による変化の激しさは国内有数。

地形地質 市内には海・山あり。一方、特徴的で知名度の高い地形(自然遺産、百名山など)は全国各地に多数。



♣関川は国内有数の急流河川
♣地すべり防止区域面積は新潟県が第1位でうち上越市が3割、上越・魚沼地方で2/3

♥信濃川(千曲川)は日本最長河川
♥百名山など著名な火山・非火山が集積
♥長野県は同3位で県北部に集中
♥糸魚川の世界ジオパーク認定は国内初

フォッサマグナ上の新しい地域が大半。新旧・高低・長短など多様な地形のコンパクトな集積度は国内有数。



調査の方法

※ 時期に関する情報は、紙面の都合上省略しました。

以下のような学習や交流活動等を通じて、情報収集や編集作業を行う予定です。

❖ 勉強会の開催

「信越県境エリアの魅力を探るトークイベント」(勉強会)を開催し、有識者をゲストに招いてお話を伺います。1月から開始

❖ 調査活動の実施

文献調査のほか、地元へのアンケート調査やヒアリング調査などを行います。

❖ 情報共有の仕組みづくり

対面やオンラインによる情報や意見交換の場を設定するとともに、情報共有の仕組みをつくりまします。

❖ 試行的な情報活用

調査結果を用いたアイデア出しを教育・観光分野などで試行的に実施し、その結果をもとに調査方法を改善します。

これらの活動の進展については、フェイスブックやホームページなどで随時紹介しますのでご覧ください。イベントへの気軽なご参加や、情報提供へのご協力もよろしくお願いしします。(内海)



Facebook Homepage

信越県境エリアの魅力を探るトークイベントの開催
(2021.1.21～)



信越県境
地域づくり交流会
まなぶ・つながる・ほしめる

信越県境地域づくり交流会の活動の一環として、この土地ならではの魅力的な地域資源を様々な角度から取り上げ、その特徴や成り立ち、影響などについて学ぶオンラインのトークイベントを開始しました。

各回とも、それぞれのテーマに詳しい方をゲストにお招きし、話題提供いただいた後、事前アンケートやオンライン上で寄せられた参加者の質問を交えながら、和やかな雰囲気の中で聞き手との対談形式によりお話を伺いました。

ライブと録画配信で毎回50名以上の方々に参加いただき、終了後のアンケートでは「魅力と大切さを再認識した」「もっと知りたくなった」などの声が寄せられました。



▲ 第2回の様子



▲ 第4回の様子

今後もこの地域の魅力や可能性を学ぶ機会として、様々なテーマを取り上げて継続的に開催する予定です。また、このトークイベントを1つの起点として、地域資源に関する更なる情報収集や情報共有に向けて、関心をお持ちの皆さんと交流を深めることも計画しています。

連続フォーラム「地域課題からみた学校教育の将来像」の開催 (2021.2.24)

昨年度から行っている上越教育大学・教科内容先端研究センターとの共催フォーラムについて、今年度はオンラインで開催しました。講師は(株)日本総合研究所首席研究員の藻谷 浩介氏にお願いし、「コロナ禍でみえてきた地方の魅力と課題」をテーマにお話いただきました。

地域づくりと教育においては、データに基づく事実確認に加え、触覚や嗅覚が大切であること、特に上越では雪の存在をはじめ、大都市との違いをポジティブに捉えることなど、様々な指摘をいただく機会となりました。(秋山)

編集後記

本年1月、当市は記録的な大雪に見舞われました。私自身、市街地でも家から出るのが困難なほど積もった雪を見て、改めて上越市の特徴の一つと認識したところです。暮らしのうえでは大変だと思いがちのもの、本紙で紹介した地域資源の調査活動などにおいて、雪から得られる恵みにも着目し、上越市を形作る要素の一つとして見つめ直していきたいと思えます。(伊倉)

このニュースレターは、木田庁舎1階市政情報コーナーや各総合事務所でも閲覧可能です。当研究所のホームページにも掲載しています。

第1回		テーマ：妙高戸隠連山国立公園 開催日：2021年1月21日(木) ゲスト：秋本 周 さん (環境省戸隠自然保護官事務所 自然保護官)
第2回		テーマ：上信越高原国立公園 開催日：2021年1月29日(金) ゲスト：岸 秀蔵 さん (環境省上信越高原国立公園管理事務所 保護管理企画官)
第3回		テーマ：発酵・長寿 長野県 開催日：2021年2月18日(木) ゲスト：蟻川 幸彦 さん (長野県食品工業協会 事務局長)
第4回		テーマ：雪国・新潟の発酵食文化 開催日：2021年3月1日(月) ゲスト：桑木野 恵子 さん (「里山十帖」 シェフ)
第5回		テーマ：大地の形成から見た 信越県境地域の際立つ特異性 開催日：2021年3月18日(木) ゲスト：赤羽 貞幸 さん (信州大学名誉教授)

今後のテーマや申込方法などは、ホームページやフェイスブックに随時掲載しますので、ぜひご覧ください。(秋山)



第8回越境地域政策研究フォーラムでの発表
(2021.2.27)

愛知大学の主催するフォーラムにオンラインで参加し、信越県境地域づくり交流会についての活動報告を行いました。同大学は「越境」による地域づくりのパイオニア的存在であり、全国の実践者や研究者とのネットワークを有しています。この交流会の立ち上げ段階で同大学の支援を受け、その後の活動への評価もいただく中で今回の発表に至りました。これまでの活動を論理的に振り返り、今後のあり方を考える好機となったほか、参加者からのエールもいただくなどありがたい機会となりました。(内海)

上越市創造行政研究所ニュースレター
「創造行政」 No. 49 Mar. 2021

発行：上越市創造行政研究所
〒943-0804 新潟県上越市新光町1-8-11 上越保健センター
TEL:025-526-3490 FAX:025-526-6184
E-mail : souzou@city.joetsu.lg.jp
<https://www.city.joetsu.niigata.jp/site/souzou-gyosei/>